

# 富山県上市域の地鉄の駅巡り

## 駅と駅周辺の風物誌

### 1. まえがき

上市に長く住んでいると、上市全体が庭のようにみえ、何の不思議もなく学校や駅や商店などが空気(大気)のような存在にみえてくる。そして、大気には街から醸し出されてくる生活の営みの匂いがたなびかせてもくれる。そんな街中の居住を楽しんでいると、何につけ理屈めいたルーツが知りたくなり、上市域にあるいくつもの駅が急に気になりはじめた。駅は上市町の交易や通勤通学の拠点として、我らの生活を長きにわたり支えてきているだけに、駅と駅周辺の大気を風物として述べることにした。お付き合いください。

### 2. はじめに、上市と鉄道

上市では、平安期(725年)には大岩が、少し遅れて(986年)黒川城が、さらに遅れて鎌倉期(1370年)には眼目山立山寺が、相次いで開かれ、多くの修験者や参拝者で賑わいを見せるとともに商業が栄え、次第に市場も拡充していった。

そして、上市は県東部の交通の要所となり、北には滑川への街道、西には富山への街道、南には立山への街道が結集することとなった。

大正の時代(1910年代)に入ってから、鉄道が敷かれたが、主な路線は(南北を走る)大河を横断するのを避けるがごとく南北方向に鉄道が敷かれ、滑川から上市を通過して五百石(さらに岩峯寺)までの路線が地域の動脈となった。その後は鉄道網がさらに整備され、鉄道網が地域の経済活動や地域の営みを支えて今日に至っている。今の自動車時代になっても、鉄道の存在はきわめて大きい。

そこでここでは、地域の営みを鉄道網と地域を結び駅に着目し、駅舎を中心にして駅と営みと題してまとめて見ることにした。扱った駅は上市に関するものとし、上市を中心にして、北は滑川、西は寺田、南は五百石をも扱った。

### 3. 富山県東部の鉄道の歴史

富山では大川が何本も南北に走っているため、交易路は南北に確保することになり、中新川地区で

は滑川から上市、五百石、岩峯寺というようにリンクしている。そのうち文明の力が県東部に及ぶようになるのと、地域の有志が率先して鉄道「立山軽便鉄道」を立ち上げ、1913年には、滑川から五百石まで、1919年には立山(岩峯寺)まで延長した。

このほか県東部にいくつもあった南北路線の鉄道が岩峯寺から滑川、石田浜から宇奈月、岩瀬から富山、とあったが、1931年までには、宇奈月から富山まで、富山から立山(千寿ヶ原)までもつながっていった。なお、このような鉄道網の充実は立山町に住む佐伯宗義氏の鉄道への思いから始まり、また佐伯氏の情熱がアルペンの実現に向けても傾けられていった。

その後は、モーターレクションにより、鉄道経営がかなり苦しくなったが、種々の創意工夫により、生活の支えとして今日に至っている。

以下に諸データを記しておく。

#### ○現在の路線

本線：富山、稲荷町、寺田、上市、滑川、

魚津、黒部、新黒部、宇奈月：53.3km

立山線：富山、寺田、五百石、岩峯寺、立山：34.0km

(実際の立山線：寺田・立山：24.2km)

上滝線：富山、稲荷町、南富山、岩峯寺：17.3km

(不二越線：稲荷町・南富山 23.3 km),

(実際の上滝線：南富山・岩峯寺 12.4km)



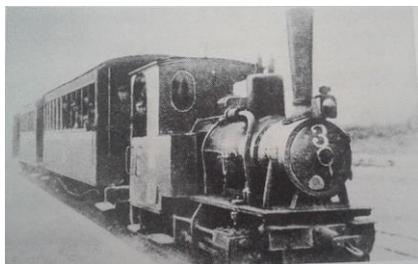
路線図、滑川から五百石までの駅、地鉄の路線図を引用

○歴史、中新川中心の歴史

- 1913 立山軽便鉄道開通  
滑川～五百石：開通
- 1921 五百石～立山(岩峯寺)
- 1930 富山電気鉄道設立
- 1931 立山鉄道(立山軽便鉄道)と合併  
田地方～上市口 上市口～上市 寺田  
～五百石：開通  
上市～滑川：改軌電化  
電鉄富山～田地方：開通
- 1937 立山線が粟巣野まで延長
- 1943 富山地方鉄道発足(富山電気、加越、県営、  
黒部、越中、市営の各鉄道の一本化)  
上市口～上市：廃線

○上市を中心とした鉄道概要

- ・立山軽便鉄道時代
  - 1913 滑川～上市～五百石 14.2km
  - 1919 五百石～立山(岩峯寺) 6.9km
  - (1922 上市～富山：バス開通)
  - (1928 上市～魚津：バス開通)
- ・富山電気鉄道時代
  - 1931 上市口～上市：開通  
上市～電鉄富山、上市～滑川：全通  
各駅はこの時に建設。
  - 1932 上市～五百石(軽便鉄道路線)：廃止
- ・富山地方鉄道時代
  - 1943 上市口～上市：廃止 0.6km  
上市口が上市となる
  - 1947 上市駅舎改築
  - 1972 総合ターミナル駅として改築



開業時の軽便鉄道列車 富山県史より

#### 4. 滑川から上市、寺田通り五百石までの駅

扱った駅は以下のとおりである。このうち、上市町の駅は太字で示しておく。

- 滑川から上市の区間：  
滑川、中滑川、西滑川、西加積、中加積、  
**新宮川、上市、**
- 上市から寺田の区間：  
(上市)、**新相ノ木、相ノ木、**泉、寺田
- 寺田から五百石の区間  
(寺田)、田添、稚児塚、五百石

#### 滑川

滑川駅は愛の風の風鉄道の滑川駅と並列して1913年に竣工、後1988年に改築された。JR時代には、JRの連絡通路が地鉄までのびていて、乗り換えは大変便利であったが、今は一般地下通路を経て愛の風との乗り換えとなっている。

地鉄の前進である立山軽便鉄道は、ここ滑川を起点として、愛の風と並行に西方向に走り、中滑川から南に折れて上市へと向かっていた。

駅周辺の町の様子について述べる。駅の南側にはこれから再開発が始まろうとしていて、分譲されたサラ地が広がっている。北側には、新興住宅地が広がり、ホテルイカミュージアムや道の駅もある。西側には、一大ショッピングタウンが広がっている。



上：駅舎、下：ホーム、右側に愛の風鉄道の線路

#### 中滑川



上：駅舎 下：改札口

中滑川の地域がもともとの滑川旧市街であった。ここから海の方に出れば、北国街道が海岸線と平行に走っていて、瀬羽町は昔は滑川の中心地であった。しかしながら、時代が下るとともに賑わいが喪失し、滑川全体では国道の旧8号線沿いに今風の商店が移ってしまっている。

そんな中滑川であるが、かつては、1969年竣工の滑川農協会館のビルの中に駅があり、1階には多くの商店が入って賑わっていた。2013年にはビルが壊され、2014年に新たに作られた新駅舎は外見ほとんど民家そのものであり、また駅前広場が何の変哲もなく広いので、駅らしさがあまり見られないのが少し残念である。

#### ◆ 滑川中心地、瀬羽町の文化的町並み

北国街道の宿場町滑川宿には江戸末期から明治・昭和初期に築造の古い町家と寺院が6件残っている(以下に記)。これらについては文化的価値が高いとして2010年より保存運動が始まり、最近では「保存は活用あつてのもの」という考えで滑川宿を息づかせる種々活用の取り組みが進められている。

- ・城戸家住宅主屋
- ・旧宮崎酒造店舗兼主屋
- ・廣野家住宅主屋(四川亭)
- ・菅田家住宅主屋
- ・廣野医院
- ・小沢家住宅店蔵
- ・養照寺旧本陣・養照寺本堂

## 西滑川

駅周辺には滑川高校があり、朝夕には高校生の乗降で駅は賑わっている。駅舎については、昔の駅舎は取り壊され、代わりにかつての駅舎の横にあった倉庫が改装されて駅舎として使われており、そこにはコンテナやプレハブの雰囲気が漂っている。ホームについては、大きくカーブした線路に沿っている。カーブしたホームがあるのは地鉄の中では岩嶺寺、寺田、稲荷町などの分岐駅があるが、一線一ホームの駅では西滑川駅だけという大変珍しい駅である。

中滑川と上市の間は実に閑散としている。理由は、滑川に近ければ愛の風鉄道で安く早く富山に行けるし、また上市まで行けば、上市始発の富山駅行きが結構本数があるからである。



上：ホーム 下：駅舎

## 西加積

ホームだけの駅である。待合所はホーム上に設置されている。道路からは、階段とスロープでホームに出られるようになっている。



駅全景、ホームと待合小屋

## 中加積

上市から中滑川の間で、上下の電車が行き違い(上下線で列車交換)できるのはここ中加積のみであり、その意味でも重要な駅である。昔は、駅周辺には小さな製薬会社が立ち並んでいて、駅は貨物の取り扱いもしていた。ところが、大企業有利の薬事法が施行(1943, 1948, 1960年)されてからは、いくつもの小さな製薬会社がなくなり、当時の面影は全くなかった。とはいえ無人駅には似合わず、駅舎跡地や駅前の設えにより、加積地区の中心にふさわしい気品が何となく漂っている。



上：ホーム 下：駅舎

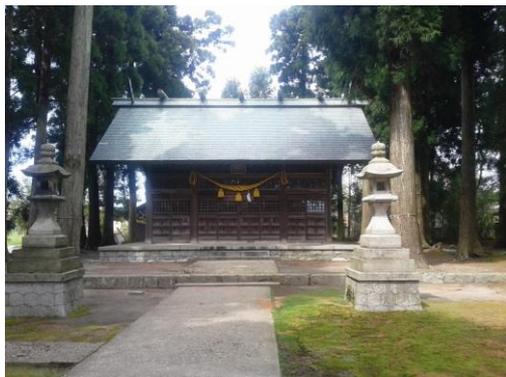
## ◆ 加積地域について

加積と呼ばれている地域は滑川市から(市と南接する)上市町にまで広範囲に及び、滑川域では「北加積、東加積、浜加積、早月加積、西加積、中加積、一部だが山加積」、さらに南域(上市)では「南加積、山加積」がある。

加積一帯はかつて京祇園社の荘園、あるいは奈良の加積社の荘園であったといわれており、平安期の現地荘官(荘司)が地方豪族として権勢をふるっていたようである。時代が下ると関東から土肥氏が入ってきて堀江庄に居を構え統治していたという。

堀江庄から川(上市川、郷川)をさかのぼっていくと山加積にでる。ここに黒川遺跡という一級の文化財として、円念寺山経塚 黒川上山墓跡 伝真興寺跡がある。これは、荘官の豪族にゆかりの文化財といわれている。

なお、加積地域の中心に位置する中加積には加積神社があり、(加積族)の守り神が祭られている。かつての加積地域の繁栄ぶりを偲ぶことができる。



加積神社

## 新宮川

まず駅名から。昭和の合併前までは宮川村とよばれた地域の中心に軽便鉄道時代の宮川駅が建てられ、ほどなく新宮川駅と改称された。その後、軽便鉄道が廃止され電気軌道の駅となった。なぜ「新」という冠が付いたかは定かではない。

次に、駅舎の変遷から。新宮川の駅舎はまずまずの風情のある建物であったが、1975年に鉄道事業の合理化により、350m南にホーム一個の無人駅となった。その後は、数年前から公共交通見直しの一環でパークアンドライドの機能が備わった。なお、パークアンドライド施設では、自転車は60台、車は73台パーキングに加えてトイレと待合スペースもあり、上



上：駅のパーク、 下：駅舎

市町民はここに車を置いて通勤や買い物に利用している。

## ◆ 宮川の風物

- ・江上遺跡は北陸高速道路建設の際に発見された大規模な弥生期の遺跡であり、ちょうど路線に沿うような形で細長く分布し、今は高速道路の直下に眠っている。
- ・当該地は映画やTVにてしばしば取り上げられた。とりわけ、2011年の三浦友和主演の「レインイエズ 愛を伝えられない大人たち〜」では、上市と新宮川、新宮川と中加積の間で剣岳を背後に電車が疾走する光景は我らを感じさせた。

## 上市

地鉄本線では、上市を基点として北の滑川への路線と西の富山への路線がスイッチバックで結ばれている。これは、滑川からや富山から直接、大岩不動に乗り入れる計画によるもので、1931年には当時上市口と呼ばれていた現在の駅から0.6km程東に行ったところに上市駅があり、大岩乗り入れが準備されていたという。その後、戦時により計画がとん挫し、盲腸のような路線がネックとなっていたので、1943年には上市口と上市の間が廃止され、上市口が今の上市駅となった。

そんな上市駅では、車両基地や貨物専用ホームをもち、路線のスイッチバックにより駅正面を有する拠点駅としての風格があった。しかし、駅の周辺には水田と紡績工場があったことにもよるが、広場横に通勤客相手の自転車駐輪店が二軒のみで他には商店の一つもなく、いかにも田舎の駅というのが実状であった。



上：1972 に竣工の新駅ビル

JAビルの奥側に駅。初めて上市を訪問する方々にとっては上市駅の看板を見つけるのに若干手間取る。

中：1947 に改築の駅舎

(2011 上市町思い出の写真展より)

下：駅ホーム、バックには大日、劔が見える

1972 年には駅舎を取り壊し、農協のショッピング駅ビルが建設され、駅はその中の一部に収まった。今まで駅前に商店がなかっただけに、大きな期待を集めた駅ビルには、食料品スーパー、家具スーパー、本屋、洋品店、喫茶店、菓子家、飲み屋街、ボーリング場、パチンコ店、ゲームセンターなどがあり、多くの乗降客や地域住民で一日中賑わっていた。

しかし、2000 年ころから乗降客の減少に伴って、多くの店が撤退し始め、2010 年頃には駅ビルは農協の事務所として使われ、いわゆるお店はパン屋さんと一軒の飲み屋のみとなってしまった。

(ボーリング場やパチンコ店は 1980 年代頃に撤退)

そんな駅ではあるが、富山や魚津方面からやって来る上市高校に通う生徒たちで朝夕はにぎわっており、また富山駅周辺の駐車場難もあって少なからずの勤め人も電車を利用している。やはり、駅は昔程ではないにしても我らの生活を支えているといえよう。

## 新相ノ木

2013 年に上市と相ノ木の中に設けられた新駅である。もともと、相ノ木駅と上市駅の間が 2km と長い距離であり、しかも相ノ木駅そのものが窮屈で手狭なため、新駅が望まれていた。そこに相ノ木地区のいくつかの振興住宅団地ができたことにもより、新駅が設立となった。

新駅は上市街道(富山上市線)と立山魚津線という幹線道路がクロスする場所に立地している。こちら一帯は田園地帯であり、数年前にショッピングモールなどいくつかの大規模施設がつけられ賑わいをみせている。そこにパーク&ライドで整備された駅が出来、一帯はますますモダンな様相となった。

この地域から富山に通う通勤や買い物の皆さんは車を相ノ木駅前無料パークに駐車し電車に乗り換えている。かつては、舟橋駅もパーク&ライドで無料パークがあったので、上市の人たちが舟橋を利用していましたが、パークが有料になった後は、新相ノ木を利用するようになった。



上：駅北側の風景



下：駅西側の風景

晴れていれば立山連峰がきれいに見える

## 相ノ木

相ノ木は上市町の西端地域一帯であり、奈良時代の頃には条里制がしかれ、古くから開けていた起伏のない広々とした水田地帯である。最近では周囲に多くの新興住宅団地が出来にぎわっているものの、相ノ木の元からの集落はいまなおひっそりとしている。

相ノ木駅は受難の駅であり、1931年に(現在の新相ノ木駅の場所に)設置されたものの、1944年には廃止され、1949年にやっとのことで現在の場所に再設置された。その後、1971年には新宮川駅と共に廃止が計画されたが、地元の要望で何とか存続ができたという。

駅は相ノ木集落の縁にくっついたという表現がぴったりする程、駅前広場も何もなく、幅1-2m程度の取り付け道から来て、いきなりホームがあり、待合小屋がある。このためか、周辺に新興住宅団地があっても乗客の多くは隣の新相ノ木駅を利用しているのが実状である。



相ノ木駅全景

## 越中泉

この地域一帯は白岩川、上市川、常願寺川の扇状地端部にあたり、自噴水の泉があったことから泉と称され、弓庄、横越、神田、辻、女川新の5村からなっていた。ここらも、奈良時代には条里制がしかれ、古くから水田地帯として開かれていたという。

昭和の合併で弓庄と横越が上市に帰属し、他は五百石に帰属した。今現在、泉と名乗る地域は弓庄の西側にあたり、弓庄神社を中心としている。そんな泉地域ではあるが、集落はさほど大きくはなく、また周辺には新興住宅団地もないためか、かえって昔の面影がみてとれる。

駅は設置当初からの無人駅であり、駅前広場もなく、狭い取り付け道がいきなりホームへと繋がっている。



上：越中泉駅 下：弓庄神社

ホーム上の待合小屋がひっそり感を漂わせている。

なお、古老が(井戸掘削業の)親から聞いたという話によれば、5m 深さまでは通常の土であるが、5~8m 深さまでは岩盤があり、その下に立山の清流地下水が脈々と流れていたという。この地域では、表層度が大変に軟らかく、水田では腰まで浸かって作業する程であり、宅地には向かなかったため、新興住宅は団地が造成されることは無かった。

## 寺田

本線の寺田駅は1931年に竣工した駅であり、立山線の起点でもあり、上市、滑川、黒部などから立山に向かう乗り継ぎ駅である。

1920年代では立山方面からは富山に直接乗り入れていたが、1940年代頃からは、寺田と岩峯寺の間に限定して電車が走っていた。1969年からは電車はすべて富山から立山まで直通運転するようになった。これに伴い、富山から上滝をへて立山に向かっていた路線は岩峯寺までとなった。



上：駅舎 下：駅構内

## 田添

この駅は田園地帯の真ん中にあるので、直ぐに駅と分かるが、ひっそりとしている。



駅全景

## 稚子塚

駅そのものは簡素である。駅周辺には稚児塚という古墳があり、今は整備されていて史跡となっている。



上：駅 下：稚子塚遺跡

## 五百石

ももとは、立山軽便鉄道の駅として1913年に建てられた五百石駅は1931年に立て替えられた。その後、駅周辺の再開発として、2012年に「立山町元気交流ステーションみらいぶ」ができ、駅はその中に入っている。なお、みらいぶには、図書館、保健センター、介護や福祉センター、交流スペース・サロン、貸し部屋などがある。



上：旧駅舎、北陸の私鉄・北陸の駅HPより引用  
下：みらいぶ

#### ◆ 軽便鉄道と中新川 (節2と重複)

富山では、その昔、東から西に向けて、黒部、滑川、水橋、岩瀬、新湊、、、といったように湾岸一带にいくつもの町が発展していた。こうした町が内陸部に(主に南方向に)ある町をいくつも繋げて交易を次第に賑わせていった。これは、南北に走る河川を活用した水運のおかげである。

中新川の場合を見てみると、滑川から上市、五百石、と南北方向に町が連なり、陸路も南北で整備されていった。これには、今ひとつ理由がある。陸路では、河川が陸路による東西の交易を阻んでいた。当時、大河川に橋をかけることが出来なかったことが理由としてあげられる。

時代が下り鉄道時代に入っても、南北方向に分布する町を繋ぐように、鉄道もまた南北方向に走っていた。これが立山軽便鉄道であり、1913年には滑川から上市を経て五百石まで敷設された。その後1919年には五百石から立山(岩嶽寺)まで延長となった。

さらに時代が下って、1931年には推進母体が富山電気鉄道となってからは、県都として発展する「富山」と各地が直接結びかつ輸送力強化をめざして、国内標準軌道で電化が進められ、常願寺川という大河を横断する悲願の鉄橋を完成させ、上市から寺田を通り富山まで結ばれた。

また上市から滑川まではこれまでの軽便鉄道を改軌電化してリニューアルした。一方、五百石もまた富山との直接接続を求めて、寺田から五百石までは新規に鉄道が敷設された。これをもって、これまでの交易路であった上市から五百石までは寺田経由となった。

ともかく、1931年に現在の鉄道網が整備されたのであり、上市も五百石も富山と直結し、これまでの南北から東西へと交易路が完全に変わった。

## 5. 上市、こぼればなし

### 5.1 信仰の町、上市

上市の古くからある三つの寺院

- ・725 奈良時代 大岩山日石寺 行基により開山といわれている。
- ・986 平安時代 真興上人が建立 真興寺
- ・1370 室町時代 立山寺を開く 大徹宗令により

### 5.2 立山参詣路

立山信仰でにぎわっていた産廃路は以下のとおりである。

滑川路：滑川・三日市(上市)・日中・岩嶽寺

大森路：富山・大場・大森・岩嶽寺

いたち川路：富山(善名)・花崎・上滝・岩嶽寺

滑川山麓路：魚津・滑川(吉浦)・追分  
・上市・日中・岩嶽寺

このほか、上市にゆかりある参拝路は；

大岩から直に山に入るルート

大岩・大辻山・大日岳・室堂・雄山

黒川・護摩堂・早月側左岸尾根伝い

・大日岳・室堂・雄山

### 5.3 立山参詣路

徒歩の時代

滑川路：滑川・上市・柿沢

富山路：泉・神田・横越・柿沢

軽便鉄道開通

上市駅(三日市)、大岩口駅(横越)が下車駅

### 5.3 鉄道で通学する高校生の様子

上市にある公立高校「上市高校」は1920年に農学校として設立し、1948年以降に総合高校として、普通科、薬業科、農業科、畜産科、農林工学科、家政科、生活科の7科があり、その名を轟かせていた。

その後1997年に学科改組拡充で細分学科を廃してすべて総合学科に統合した。今までの普通科なら普通コース、農業ならグリーンコースといったようにコース編成で生徒が自由に授業科目を選べるようになった。これが上市高校の新しい魅力となって、総合学科を目指して若き女生徒とが県東部からどっと押し寄せ、今では7割が女性とのことである。

昔は、男女半々で上市駅を利用して通学していた。いまでは、ほとんどが女性である。そんな光景を時には奇異に感ずることもある。

### 5.4 賑わい創出の取り組み

今駅前をにぎわうようにと、何処ぞかの団体が主になってWSしたり、勉強会したりしており、駅から役場までの道を花の道に使用とか、街灯を綺麗に小とかいっているが、駅内部が閑散とし、かつ人のいない状態である。これを何とかする抜本的な策がない以上、なんともならないといえる。

## 7. まとめ

いまや自動車時代、と入っても鉄道は軽便鉄道時代を入れれば100年。この間、市民生活を支えており、やはり歴史を感じることに成っている。その意味で駅を纏め上げたことに価値を見出したということである。

なお、これは新建富山支部の地鉄駅めぐりで中新川地区メンバーが実施した調査の一部であり、関係各位

に謝意を表す。

## A. 参考文献、引用文献

- ・富山県史
- ・富山地鉄歴史
- ・上市町史
- ・立山町史